

# 礼拝儀要解

山崎弁栄（著）

酒井正空（訳）

原文

## 安心要領

宗教は人の生存いけるに対して最終なによりの目的もくてきに指導みちびきを  
与ふものなり、即ち心身こうじょうの向上きよし靈ひとき生命ひとと  
為なさんが為いだいに偉大なる力を有せる神尊かみに帰きし  
此に依えいて永遠えいの生命えんと常住じょうじゅうの平和へいに入る道  
を教しかゆ。然しからば何からか帰きす所かみの主尊かみ、何からか求  
むべき所、何からか目的とくを遂つとめべき行とく業つとめなる、是を  
宗教ようりょうの三ようりょう要領とす。

一、帰うちゅうする所とくそんの主尊とくそん、宇宙うちゅうの独尊とくそんとし偉大なる  
力を有すべし一切すくを救すく霊給すくふ如来すくに帰す。アミダ如  
来即いつち無限いっもの光明いける永恒しんじん存在きの眞神きに帰すし奉り  
此活いける如来すくを救すくの主すくと仰すくぎ一切すくの時すく一切すくの処  
に於せいて其神聖せいなる統治しはいの下きよに靈きよき生命きよとして  
事つかえまつる信心すくなり。

二、求みくにむる所しょうめつの靈国へんか、生滅しょうめつ 変化へんか 極へんかりなく  
憂うひ悲く苦のう悩たゆ絶たゆるなき世界よりのむこころに依属てんの意てんを転てんじて如  
来大光明あんりゅうの中いに而いも安立いを求いめ即いち肉いに死いし  
て靈れいに復よみがえ活こり此こを去こらずして即こち極楽界この  
聖ひと者ことなる、之こを精神こうせいの更こ生ことす。而こして

現代意識

## 安心要領

宗教は我々の人生に対しての最終目的を教授するものであり、それは身と心を向上させ清らかなる存在となる為に、偉大な力を持っている仏、菩薩、神などの宗教的本尊に帰依することで、絶対的に死ぬことのない生命の中に生き、絶え間なく続き尽きることのない平和の道を歩むことを教えるものである。そうであるならば、帰依するところの宗教的本尊はどのような存在であるか、そして帰依した本尊に何を求めていくべきなのか、さらには最終目的である身と心を向上させ清らかなる存在となるためにはどのような行為が必要なのか、これらは宗教の三つの要点である。

一、我々の主として帰依する本尊とは、この宇宙において唯一の存在であり、すぐれた力をもってすべての生きとし生けるものを根底から救ってくださる如来（仏陀）のこと、つまり阿彌陀仏のことである。限りない智慧と慈悲の光を持ち、眞の神ともいえる阿彌陀仏に帰依して、この活ける阿彌陀仏を救いの主として信じ、どのような時であれ、どのような場所であれ、阿彌陀仏の尊い思し召しのもとで清らかなる人として生きることが信仰である。

二、我々が求めるべきは穢れのない清浄な世界、生まれては死に、死んでは生まれ常に變化し、また憂いや悲しみ、苦悩が止むことがない現在の心を翻して、阿彌陀仏が放つ智慧と慈悲の光の中に安心を定めること、つまり迷いの私が起こす執着心をなげうち、清らかな信仰の道に進み、ただ今から仏の世界の住人たる菩薩となること、これを精神の生まれ変わりという。

それに加えて、

このにくだいおわり のちむよ  
此肉体 終て後無余ネハンなる眞実の浄土に生  
ず、之を体の更生とす。併て是を求むる所の  
みくに  
靈国とす。

三、救はるゝ行業、所求の目的を達せんが為に  
如来の光明に依りて靈き生命に入る行業なり。

先づ主なる如来に帰し大光明を獲んが為に

讃嘆祈禱を捧て拝礼し常に請求感謝の誠心よ

り一ら聖名を以て祈念し若は口称若は観念

専ら如来を憶念し、彼此の三業相離れざるを

要す、若は祈禱拝礼または称名三昧又は坐禅工

夫等の心行を作す所以のものは即ち是如来の

心光に接し而も靈き生命に入るべきの手段た

るに外ならず、要する処宇宙の主なる如来を信

じその大光明中に安立し之に依て生き働き存

すべきあるなり。

仰いで諸々の賢者に白す、願くば朝夕に於て

斯光明讃嘆章及び祈禱をもて而も拝礼し尋常

に四六時中大光の中に靈き日活あらんことを

祈り玉へ、然る則は眞正の幸福は必ず与らる

べし。

是宗教安心の要領を陳て以て信念の修養

あらんことを勧むる所以なり、仏陀禅那敬って

言す。

我々の命が終わった後は肉体的制約からも解  
き放たれた眞実の仏の世界を体験するのであ  
る、これを身体生まれ変わりという。これら  
二つを合わせて、求めるべき清らかなる世界と  
する。

三、阿弥陀仏の救いにあずかる行為、身と心を  
向上させ清らかなる存在となる目的のために  
阿弥陀仏の智慧と慈悲の光によって、清浄な宗  
教生活に入る行為。まず、我々の主である阿弥  
陀仏に帰依して、阿弥陀仏の智慧と慈悲を被る  
ために、阿弥陀仏を讃え祈りを捧げ、礼拝し、  
常に阿弥陀仏に請い願ひ感謝の眞心から阿弥  
陀仏の御名を称えることに専念し、「南無阿弥  
陀仏」と口にしたり、阿弥陀仏と自分を一つに  
して、一心に阿弥陀仏をお慕いし、阿弥陀仏と  
自分との身体と言動と精神の三つ要素が離れ  
ないようになることが必要である、祈禱礼拝、  
「南無阿弥陀仏」と称える念仏三昧、坐禅や公  
案などの心構えや修行の実践は、阿弥陀仏の救  
いの光に接し、清らかなる生活に入るための手  
段である、つまりは大宇宙の中心にいらっしや  
る阿弥陀仏を信じ、阿弥陀仏の放つ智慧と慈悲  
の光に安心を定め、これによって生き働くべき  
ものである。

敬って賢者である皆様に申し上げます、どう  
か朝晩に『無量寿経』に説かれる「光明歎徳章」  
を読み祈り、加えて礼拝し、どのような時でも  
阿弥陀仏の光のなかに清らかなる生活ができ  
るように祈ってください、そうすれば本当の幸  
福は必ず与えられます。

宗教における心の定めかたの要点を述べて、  
それによって信仰の修養をお勧めする次第で  
す、弁栄が敬って申し上げます。

## 如来光明歎徳章要解

### 序

如来は宇宙の生命なり。聖旨に帰命ふものは  
永恒の生命とならん。

如来は宇宙の光明なり。聖寵を光被るものは  
聖き靈とならん。

六大本ビルの身心なりと識るときは、宇宙の  
無限なる即ち如来の法身なり。然らば即ち宇宙  
は外面より観る時は蒼々たる天地唯物の存在

の如くなるも、内は即ち心霊に充滿せ玉ふもの  
と曰はん。天地万物に秩序あり条理あるは全知

の作用にて一切の運動活動は全能の功用にま  
しませり。

全知全能即ち如来の光明なり。（若し威力と  
光明とを分ときは威力を全能とし光明を全知  
とすべし。今は総てを光明とす。）斯光は天則  
秩序の理法としまた原動力として一切万物を  
産出活動せしむ。若し宇宙に斯光なからんか、  
人に精神なきと同じく盲目的死物的秩序もなく  
活動もなかるべし。然るに万物に秩序あり運  
動あるを見る時は、誰か此性能の存在を否定す  
ることを得ん。斯光天則の理法として万物を開  
発するのみにあらず、進んでは一切の生命を向

上し、聖き靈と成し、終局の目的なる涅槃に撰  
取し玉ふ理性存せり。ネハンとは永恒不変なる

常世の靈界。彼処の万物は光明常に輝き、唯

光栄と靈福に充さる処なり。聖典に示せる法蔵  
の本願十劫正覚の方便法身は此目的の光とし  
て示現し給ひしなり。三世の仏陀は此目的の光  
を衆生に教へんが為に出でたまへり。神

靈不測奇異絶驚べきものは宇宙一大靈力なり。

斯光明なり。この光天地に先だち万物を超へて、  
始めもなく終りもなく、永恒本然にして、内に  
非ず外に非ず、何の時何の処にも存在して不思

## 如来光明歎徳章要解

### 序

阿弥陀仏は万物の生命そのものである。阿弥  
陀仏の思し召しに従う人は朽ちることのない  
命を得ることができる。

阿弥陀仏は智慧と慈悲の光を与える存在で  
ある。この光のはたらきを被る人は清らかなる  
心となることができる。

万物における物質を構成する地・水・火・風・  
空という五大と精神を構成する要素である識  
大の六つの要素が仏の身と心であると認識す  
る時は、この無限ともいえる宇宙全体が産みの  
親としての阿弥陀仏である。そうであるならば、  
宇宙を外側から見れば、天地の空・海などが青  
い様や草木が茂っている様はただの物質のよ  
うではあるが、内面より見た時はこの宇宙は阿  
弥陀仏のあらゆる功德を秘めたものといえよ  
う。天地万物に秩序や道理があるのは、阿弥陀  
仏の智慧が宇宙全体にはたらいており、また万  
物に運動や活動があるのは阿弥陀仏の意志が  
宇宙全体にはたらいているからである。

この万物にはたらく智慧と意志こそが阿弥  
陀仏の光の本質である。（もし阿弥陀仏のはた  
らきを威神力と光明に分けるとすれば、威神力  
を意志とし、光明を智慧とする）。この光は宇  
宙に正しい秩序を与える原動力であり、一切万  
物を産み出し活動の意志を起こさせる。もしも、  
宇宙間にこの光が無いならば、人に精神が無け  
れば理性的活動ができないように、万物もまた  
秩序や活動がなくなってしまうにちがいない。  
ところが、実際万物には秩序も活動もあること  
を見れば、誰がその秩序と活動としての光のは  
たらきを否定することができようか。この光は  
宇宙の正しい秩序として万物をより良きほう  
へと導くのみではなく、積極的に据えれば、宇  
宙間の生きとし生ける者を進歩させ、清かな  
る心へと成長させ、最終目的である涅槃とい  
う覚りの世界へ導く仏の智慧のはたらきである。  
涅槃とは朽ちることのない清らかなる世界の  
ことである。その世界の万物は常に智慧と慈悲  
の力で光輝き、繁栄と精神の幸福が充たされ  
るところである。『無量寿経』において、阿弥  
陀仏が修行時代に法蔵菩薩として一切衆生を救  
済する誓願を立てられ、気の遠くなるような長  
い時間をかけて修行して覚りを得て、仏陀とな  
ったのは、実にこの智慧と慈悲・秩序と活動を  
本質とする光をお示しになるためであった。ま  
た過去・現在・未来の仏陀たちもまたこの光

議の靈能を現はし玉へり。

喩へば太陽の能力に光と熱と化合との三線ありて地上の万物を化育すと同じく、如来の心光には智慧と慈悲と神聖との三靈能ましくて、人の知情意に対して明慧と平和と正善とに靈化し玉ふ徳ましませり。

嗚呼漚哉靈光の及ぼす処、各其類に随ふて化を被らざるなし。三悪劇烈の炎は清涼の風と変じ、天人の垢汚の服を浴ぎて聖靈の衣と化し、二乗見思の闇晴れて真空の月朗らかに、菩薩智慧の日月は自他を雙べて照し、仏陀果満の園には正覺の華開けり。されば一切の仏陀は斯光に依て一切智を證し、一切の聖者は斯光をもて永恒の命を得給へり。教祖釈迦牟尼ガヤの道場に於て正覺を證せし、イエスキリスト、ヨルダンに於て聖靈を感じたる、同じく此永恒の靈光に接したるに外ならず。

有人が自己心中に在ます神は外万物の中に存して光を放つと言へるが如く、此靈光自然界中に存在す、種々の相をもて衆生の為に応現す即ち聖典に明す処の觀音の三十三身、不動の忿怒、乃至塵数の示現身、皆是宇宙に遍在せる靈力の發現なり。自然萬物の中に活躍したる靈光は機能団体たる人格に在って聖的活動をなせり。即ち龍樹、天親、ソクラテース、マホメット、智者、善導、空海、源空の如き靈界の偉人皆此光の人格として現じたるものと言ひつべし。

宇宙恁麼か此光の不思議なる如きあらん。茲に因て一切の仏陀は咨嗟して讚嘆し、諸の聖者は絶號して稱揚する寔に所以あり。

諸の賢者よ、願くば我ら一切諸仏の讚稱し給ふ終局目的の光を信じ、如来の聖旨に帰命し無明の眠覺め、罪と苦より救靈れ、共に聖き心となりて、同じく弥陀ネハン界に生じ、正覺の華開きて、三身一如の妙果を結ばんことを。

のことを我々に教えるためにお出ましになったのである。万物の根底にはたらく光が宇宙間に大いなる力として存在していることは全くもって驚嘆せざるを得ない。この光は一切万物を超越して始めや終わりもなく、元々自然のままに存在し、万物の内側とか外側にあるということもできず、しかし何時でも何処でもはたらいっている不思議な力として現存している。

例えば、太陽の光には光線、熱戦、化学線という三つはたらきがあって、地球上の生きとし生けるものをつくり育てるように、如来が放つ救いの光にも、智慧と慈悲と神聖という三つのはたらきがあって、人の知恵と感情と意識に対して、明らかなる智慧と心の平和と正しい意志を与え育てる功德を持っておられる。

ああ、この清き阿弥陀仏の光は、各々の性格や能力に応じてその功德を被らない者はいない。阿弥陀仏の光は地獄・餓鬼・畜生のように苦しみに焼かれる炎を清涼の風へと変え、天界と人界における煩惱の汚れを清らかな心へと育て、利他精神に欠ける小乗の思想を離れて真の覺りをはっきり顯わし、菩薩として慈悲と智慧の光をもって自身と他者を照らし、終には仏陀として覺りを開く。そうであるから、全ての仏陀たちはこの光によって覺りを開き、全ての聖者はこの光によって、絶対に死なぬいのちを得られたのである。お釈迦様がブツダガヤにて覺りを開き、イエス様がヨルダンにて聖靈を感じ得なされたのも同様にこの清らかな光に接したからである。

ある人が自分の中にある神は、また万物の中にも存在して光を外へ向けて放っていると言うように、この清らかな光は自然界の中に存在して、様々な姿をもって生きとし生けるものの前に顯われる。仏典に示される觀音菩薩の三十三變化身や不動明王の怒りの姿、仏・菩薩の無数に顯われる姿というのは、宇宙間にくまなくはたらいっている不可思議な阿弥陀仏の威神力から出現しているのである。自然界にはたらいっている清らかな光は、能力ある人たちにあっては聖なる活動として顯われる。つまり、龍樹菩薩、天親菩薩、哲人ソクラテス、預言者マホメット、天台大師、善導大師、弘法大師、法然上人のような覺りの境地の偉人たちは、この光が人格に現れたものと言えよう。

宇宙にどうしてこの不可思議な如き光の存在があろう。それ故に全ての仏陀たちは嘆息し、ほめたたえ、聖者たちは声を上げて稱賛されるのである。

賢者たる皆さん、私たちも仏陀たちが称賛する救済の光を信じ、阿弥陀仏の思し召しにすがり、煩惱から目覚め、罪や苦しみの心から脱し、共に清らかな心となって、一緒に阿弥陀仏の世界に生まれ、覚りを開いて、阿弥陀仏がその身体に具えている三つの功德を私たちも身に付けようではないか。

## 第一節 如来の聖徳

「無量寿如来」「最尊第一」の五句は総標して宗を挙ぐ。如来は宇宙萬有に対して最尊たるに三義あり。

一、如来は絶体的最上者萬有に超勝<sup>ちやうしやう</sup>せる独一神尊。

二、如来は一切萬物を統攝し諸仏神明を統一せる大威力者。

三、如来は一切の生命を向上し終局目的なるネハンに攝取し給ふ大光明者。

譬へば自我が人の精神及び身体を支配する如

く、帝王が一国の人民を統御<sup>とうぎよ</sup>する如く、天体に太陽が諸々の星宿の中心たる如く、如来は宇宙萬有を統攝し一切佛陀天神の最勝尊なり。故に威神光明最尊第一なりとす。

是故に無量寿仏の下別して名を列ねて聖徳を表はす。聖徳無辺。十二の徳名を以て其性能を顕はすに悉く盡さざるなし。

無量光（法身。体大。処として実在せざるなし。）此下三光は如来の体相用の三大として宇宙に遍在せる性能なることを明す。法身は実体、一切仏陀の本地、諸天神明を統一せる尊体也。斯如来心体を体得するものは即ち正覚を成ず。

無辺光（一切慧、処として照さざるなし。）

如来四智円明<sup>えんみやう</sup>の大慧光は遍く法界を照し、衆生の知見を啓示して無上菩提<sup>さと</sup>を證らしむ。

無礙光（解脱の用、処として化せざるなし。）如来の靈力は、神聖、正義、恩寵の徳をもて衆生の肉我<sup>まよ</sup>の束縛を解きて大我の中に靈的自由を与へ、ネハンを得せしむ。

無対光。上三光の力によりて救靈<sup>すくわ</sup>れたるものゝ

終局<sup>つい</sup>に帰する処、上菩提<sup>さとり</sup>の華開きし大ネハンの

## 第一節 如来の聖徳

「光明歎徳章」（『無量寿経』）の「無量寿仏」から「所不能及」までの五句は全体において主要となる場所である。阿弥陀仏は宇宙全てのものに対しては尊き主であり、それには三つの意義がある。

一、阿弥陀仏はいかなる制約制限をうけない最も尊き者であり、全ての存在を超越した唯一の信仰対象。

二、阿弥陀仏は一切万物ならびに一切の仏や神を統一する大いなる力を持つ存在。

三、阿弥陀仏は生きとし生けるものをより良い方向へ成長させ、最終的には覚りの世界へ導く慈悲者。

例えば、自己の精神が身体を支配しているように、王様が国と人民を統制するように、また天体において太陽が太陽系の物理的中心であるように、阿弥陀仏は宇宙全体を制御し、全ての仏や神のなかで最も尊い存在である。したがって、阿弥陀仏の放つ強大で大きい智慧と慈悲の光は、全ての仏たちに中で最も尊いのである。

次に「是故に無量寿仏を～」の下に阿弥陀仏の別名を並べてその功德を表している。その功德は極まりなし。仮に十二の別名を挙げてはいるが、本来の功德はこれに尽きるものではない。

無量光（真理の身体。本体。存在していない場所はない。）これから説明する無量光・無辺光・無礙光の三つは本体・姿・はたらきを表し、宇宙間のいかなる処にもくまなく行き渡っていることを明かすのである。真理の身体というのは宇宙の本体のことであり、全て仏陀の本体であり、八百万の神を統一するところの本体である。この阿弥陀仏の真理の身体を体得する者はつまり覚りを開くのである。

無辺光（仏陀の智慧であり、いかなる処にも

こ  
都、真善美の靈界、諸仏聖者の證入する境、常寂光土又は蓮華藏世界の名をもて表せらる。諸仏こゝに至りてミダの本覺に還り、衆生此に歸して無上の果位とす。一切に超絶す。故に無対光と名く。

炎王光。世の衆生の悪質を滅殺する光用。衆生に靈性を覆ふ所の悪質存す。即ち惑業苦の三障是なり。惑とは罪惡の要素即ち煩惱なり。人此煩惱に因て悪業を作す。業因あれば必ず苦毒の果を受く。斯光よく此三障を撲滅すること恰も火炎のよく諸々の不淨物を焚盡すが如し。故に喩をもて炎王と名く。

清淨光（人の感覺を美化す）此下四光は人の心理に被むる処の光。衆生の眼耳鼻舌身の五官が外界の色声香味触の五塵の為に染汚さる。

然るに期光に美化せらる感性は四面玲瓏靈香馥郁五根清淨にして外塵の為に惹かれず。例へば蓮花の汚泥より出でて而も染著せざるが如し。

歡喜光（人の感情を融化す。）肉我の感情は諸々の苦毒と罪惡とに充さる。若し此光に融化せる眞情は平和と歡喜とは如来の泉より湧き、自然の妙樂は天地と共に盡きることなく、心広く体肝かに、人生の靈福こゝに於て極みとす。

智慧光（知力に対して知見を与ふ。）人の知力は無明にして自ら眞理を悟る能はず。斯光衆生に仏知見を与へ神秘の内面を啓示す。即ち如来の相好光明莊嚴淨土の相、また内包の徳たる慈悲、智慧、等の聖相、乃至眞法身に至るまでを知見せしむ。又一切の三昧智慧神通等は悉く皆斯光より与へられむ。

不断光（人の意志を靈化す。）人の肉我の意志は我意利己主義にして俗情非靈態なり。然る

に斯光に靈化せらるゝ時、聖靈態、高等なる道の智慧の光を照らす。）阿弥陀仏の完全円満なる智慧の光は宇宙全体を照らして、生きとし生けるものたちに仏陀の眞理を開き示して見識させ、仏陀と同等の覺りを得させる。

無礙光（束縛から解放させるはたらき、いかなる処においてもこのはたらきを被らないものはなし。）阿弥陀仏の不可思議な力は、仏教の道德律、邪を捨て正しきに向かう行為、万物を慈しむはたらきという三つの徳をもって、生きとし生けるものたちを迷いの束縛から解放して、覺りという眞理の中に眞の自由を与え、絶対的安樂の世界を体験させる。

無対光。上記三つの光によって救われたものが最終的に行き着く境地、菩提を求めて開花した大涅槃の世界、つまり仏陀の覺りの世界、眞実と善と美の極まる世界、諸々の仏陀たちや聖者たちが入る覺りの境地、眞理を現す世界という意味で常寂光土や蓮華の喩えをもって蓮華藏世界などと表現される。諸々の仏陀たちはこの世界に至って阿弥陀仏の覺りと同等な境地となり、生きとし生けるものたちはこの世界に歸依することで、無上の覺りを実現する。全てを超える故に、対することが無い絶対の光として、無対光と名づける。

炎王光。生きとし生けるものも悪しき性質を滅するはたらき。生きとし生けるものには生まれながらにして保持している仏性を覆い隠している悪しき性質がある。それは惑・業・苦という三つの障りである。惑とは罪惡の元となる煩惱である。人は煩惱によって悪しき行為をなす。

その悪しき行為から必ず苦しみの結果を受け、阿弥陀仏の光はこの三つの障りを消滅させることは、あたかも炎が不淨物を焼き尽くすことに喩えられるので、炎王と名づけるのである。

清淨光（人の感覺を美化する）。この以降の四つの光は人の心理にはたらくひかりの作用。生きとし生けるものの眼・耳・鼻・舌・身という五官が、外から入る色・声・香・味・触という

五塵のために汚される。しかし、清淨光によって精神が美化されることで、心は不信や疑念などの曇りがなく透き通って、不思議な香が漂い、五官が清淨となって五塵に惑わされることがない。例えば、蓮の花が泥の中から花開く時

徳意志となりて向上的には聖旨の指導に随ひ、また自陀平等の愛をもて二利を円満にす。

難思光（信心喚起の位。）此下三光は人の修行の三階に対する如来の光。如来の靈光玄妙甚深、初心の輩が能く測るべきに非ず、初心は唯一ら不思議の信光を仰信し、斯光に接せんが為三心五行をもて恩寵の喚起を期す。

無称光（心靈開發の位。）若し人三心五行をもて信念を修養し、如来の光に接し心靈開發する時、即ち如来の聖相を知見し、また法忍を證る。然るに其自證の妙味は言語をもて詮表すること能はず、故に無称と為す。

超日月光（聖旨體現の位。）已に心光を感じ、意志靈化し、己は即ち如来の聖旨を体し、而して行為と言語と思想とに於て靈的行為を實際に為すべき位なり。

「其衆生有りて」の下光明十界を撰す。如来不可思議の光明は遍く法界を照して、凡聖咸く其益を被むる。初に人天を益す。衆生の

三垢とは貪欲瞋恚愚痴の三毒、よく人の心意を垢汚すが故に名づく。また三垢とは人の知情意の三能を汚す処の垢質なり。即ち知力の垢たる無明と悪知を除きて真理を明かにし、心情の垢たる苦悩及び忿恨等の煩惱を除きて而も平和と歡喜なる心情とし、意志の垢たる我意薄弱の意を矯め、高向なる理想と遠大なる希望をもて向上的に進行すべき道德的行為をなさしむ。故に「斯光に遇ふ者は三垢生滅し身意柔軟に歡喜踊躍して善心生ぜんむ」と。

「若三塗勤苦」の下は、三惡道の為に拔苦与樂の益を明す。「三塗」とは地獄餓鬼

全く泥が付着していないが如くである。

歡喜光（人の感情を変化させる）。迷いの心は諸々の苦悩と罪惡で充滿している。もし歡喜光を被れば、迷いの心は平和と歡喜の真心へと變化し、覺りの世界の妙なる境地を体感し続けることで身心は豊かになる、これは人生における幸福の極致である。

無對光。上記三つの光によって救われたものが最終的に行き着く境地、菩提を求めて開花した大涅槃の世界、つまり仏陀の覺りの世界、眞実と善と美の極まる世界、諸々の仏陀たちや聖者たちが入る覺りの境地、眞理を現す世界という意味で常寂光土や蓮華の喩えをもって蓮華藏世界などと表現される。諸々の仏陀たちはこの世界に至って阿弥陀仏の覺りと同等な境地となり、生きとし生けるものたちはこの世界に帰依することで、無上の覺りを実現する。全てを超える故に、對することが無い絶対の光として、無對光と名づける。

畜生の三悪道を云ふ。若し衆生斯光に背き、邪悪残害、極重の悪を造る者は、地獄に墮すべき性格なり。嫉妬慳貪を本とし、肉欲我欲、中品の悪を作すものは餓鬼道に業なり。愚痴弊悪にして横的情操、下品の悪業は即ち畜生の類なり。視よ、世に形に於てこそ人類に相似たれ、其情操と行為をもて判断を下す時は、餓鬼道畜生道炳然たるにあらずや。斯る悪道に墮すべき性格なる悪人と雖も、斯光眞理に照され、全く既往の罪惡を自覚し、悔ひ改めて聖旨に帰命する時は便ち救はれむ。いかにとなれば大なる慈悲の光は千年の闇室をも忽ちに照破すべければなり。故に三塗勤塗の衆生も斯光に遇ふ時は即ち解脱を得んと。

「無量寿仏光明顕赫」の下は、四聖同化を明す。

声聞縁覚の二乗は自利の小聖、甲は四諦の理を觀じ、乙は十二因縁の法を縁じ、共に見思の煩惱を断じ、真空無我の理を悟り、同じくネハンの妙果を期す。斯二聖は此光の消極の方面なる真空のみを證得て、已に解脱せりと謂ひ、積極の方面を未だ曾て識らざる所なり。菩薩は覺有情とて、即ち斯光に由て靈的生活をなす聖者なり。斯光の萬徳豊備を自己の理想とし、聖旨を實現する為に益々向上し、下は一切衆生を自己と同じく光の生活とし、自他平等の利益を期すものを菩薩となす。

仏陀は三身具に証り、四智圓かに照し、斯光と全く一致し、肉我の缺點悉く盡き斯光と体を一にし、斯光の能力をもて自己の力とし、清淨法身は常にネハン界に安住し、外は身を百億に分ち衆生を度す、之を仏陀と為す。

靈異絶妙不可思議なる光明。一切諸仏は斯光に依て正覺を成じ、一切の聖者は斯光に由りて



聖靈と化す。斯光の恩徳広大なり。故に共に其靈能を讃稱して止まず。

## 第二節 修行信心分

(如来光明を獲得する修行三階あり)

歡喜 開發 體現

「もししゅじょうありて若衆生有」の四句は心光の喚起と開發を明す。其光明威神功徳を聞とは是如来の恩寵をぎやくとく獲得すべき信念のたね要素なり。上の如き光明の

真理を聞き、之が信念のもと動機となりて、

しんこうしん宗教衝動として如来にあく懂がれ、帰命信賴の心益々發達して心光を被り信念を喚起す。

信念修養に三要法あり。三心、四修、五聖行、是なり。「至心」に三心あり、聖意にかなう相應べき心の三徳。一、至心に己の罪惡をさと自覺り、専ら如来の恩寵をみと信認む。二、感情に於てはずべてこえに超て如来を恋慕し至心に憶念して止まず。

三、みくに靈国に生じ聖き世嗣とならんことを欲す。

「不断」に四修あり。一、如来に対して無上の尊敬を捧げて。二、一行三昧に専ら如来を念じてたのおもい余想をまじ雑えず。三、聖意を体信し相續して断せず。四、聖意をついに やめず体得して終身中止せず。

「称説」に五聖行あり。一、ぐぜ救世のふくいん福音なる聖典をよみ如来の聖徳及び浄土莊嚴等をありさま識り以て信念を修養す。二、懺悔と感謝のまごころ誠心を表せる朝夕等の礼拝をもて信念を修養す。三、如来のみすがたじょうどのありさま好相浄土莊嚴の相及如水の智悲聖徳を知見せんが為こころをしづめに冥想觀念をも修養す。四、一心に

聖名を称え聖旨の現はれを祈り、恩徳感謝をして信念を修養す。五、聖歌をもて聖徳を讃頌し、また香華珍膳等の供ものをもて而も修業す。

斯三要法の中、初の三心は如来の靈応を感じ心光を獲得すべき人の心意にて、四修は信念を鞏固にし完全ならしむる方法。五行は信念修養の材料なり。修養の宗とする処は自己の心意と如来の恩寵との投合にあり。即ち自己を如来の光明に投歸没人し肉我に死し靈我に復活するにあり。要する処若は口称、若は憶念、一行三昧をもて一に如来に心意を注ぎ、心々相續して止ざる時は、若は頓速に若は漸次に如来の心光と感合し、恩寵喚起の機熟し、信心覚醒めし心靈の曙となりぬべし、之を恩寵の喚起とす。

開發。上の三心五行によりて信心覚醒し、如来の心光をもて自己を返照する時は、己が罪惡を自覚し、道心の苦悶を感じ、尚進んで心靈の開發を期する時、心光内に薰じ恩寵の和氣を感じ、七覚支の華開き、妙威靈応の神機、四面玲瓏歡天喜地、身心融液不可思議、其内容の眞味は言語道断に念慮の絶たる処。こゝに於て全く肉我の罪より脱て靈我の生命とし、心機一転たるに及びて即ち人格の革新なり、之を精神の更生とす。經に「心の所願に随て其国に生ず」と。

體現。信仰の結果。恩寵開發の目的は心光を體現すべき実行にあり。「其国に生」とは往生即ら更生なり。此に二位あり。精神と及び身体なり。精神の更生とは従前の肉我を転じて

真<sup>まこと</sup>我<sup>ごころ</sup>の生命<sup>かわ</sup>と化<sup>こころばえ</sup>り、情操<sup>り</sup>一<sup>り</sup>変<sup>り</sup>する処<sup>り</sup>、便<sup>り</sup>ち新<sup>り</sup>し  
き人<sup>り</sup>となる。光明<sup>り</sup>界<sup>り</sup>裡<sup>り</sup>聖<sup>り</sup>の者<sup>り</sup>として昨日<sup>り</sup>の我<sup>り</sup>と  
異<sup>り</sup>れる観<sup>り</sup>あり。有<sup>り</sup>余<sup>り</sup>の依<sup>り</sup>身<sup>り</sup>は変<sup>り</sup>らねど神<sup>り</sup>は浄<sup>り</sup>  
土<sup>り</sup>に棲<sup>り</sup>遊<sup>り</sup>ぶ。聖<sup>り</sup>懷<sup>り</sup>の中<sup>り</sup>に安<sup>り</sup>立<sup>り</sup>する真<sup>り</sup>情<sup>り</sup>は毀<sup>り</sup>誉<sup>り</sup>  
八<sup>り</sup>風<sup>り</sup>ぼ為<sup>り</sup>に動<sup>り</sup>揺<sup>り</sup>されず。既<sup>り</sup>に精<sup>り</sup>神<sup>り</sup>更<sup>り</sup>生<sup>り</sup>し去<sup>り</sup>て  
現<sup>り</sup>世界<sup>り</sup>を觀<sup>り</sup>じ来<sup>り</sup>る時<sup>り</sup>は、昨日<sup>り</sup>のそれ<sup>り</sup>と異<sup>り</sup>れり。

曾<sup>り</sup>て蔑<sup>り</sup>視<sup>り</sup>したる如<sup>り</sup>き厭<sup>り</sup>穢<sup>り</sup>の魔<sup>り</sup>郷<sup>り</sup>にあらで、是<sup>り</sup>よ  
りは弥<sup>り</sup>向<sup>り</sup>上<sup>り</sup>し目<sup>り</sup>的<sup>り</sup>なる真<sup>り</sup>理<sup>り</sup>の靈<sup>り</sup>界<sup>り</sup>に進<sup>り</sup>むべき  
菩<sup>り</sup>薩<sup>り</sup>が天<sup>り</sup>職<sup>り</sup>を果<sup>り</sup>たすべき方<sup>り</sup>便<sup>り</sup>修<sup>り</sup>行<sup>り</sup>士<sup>り</sup>なりし。

斯<sup>り</sup>光<sup>り</sup>吾<sup>り</sup>人<sup>り</sup>を自<sup>り</sup>覺<sup>り</sup>せしむるに人<sup>り</sup>生<sup>り</sup>の真<sup>り</sup>理<sup>り</sup>を以<sup>り</sup>  
てす。然<sup>り</sup>り而<sup>り</sup>して吾<sup>り</sup>人<sup>り</sup>はいかに聖<sup>り</sup>旨<sup>り</sup>を体<sup>り</sup>現<sup>り</sup>せん。

い<sup>り</sup>な光<sup>り</sup>榮<sup>り</sup>を現<sup>り</sup>はすべき行<sup>り</sup>動<sup>り</sup>せん。曰<sup>り</sup>く、吾<sup>り</sup>  
人<sup>り</sup>は聖<sup>り</sup>子<sup>り</sup>たる靈<sup>り</sup>我<sup>り</sup>実<sup>り</sup>現<sup>り</sup>の為<sup>り</sup>にあらゆる力<sup>り</sup>を

竭<sup>り</sup>すぐき<sup>り</sup>にあり。即<sup>り</sup>ち理<sup>り</sup>想<sup>り</sup>の觀<sup>り</sup>音<sup>り</sup>として我<sup>り</sup>と他<sup>り</sup>

とを同<sup>り</sup>一<sup>り</sup>視<sup>り</sup>し、他<sup>り</sup>の苦<sup>り</sup>は即<sup>り</sup>ち己<sup>り</sup>が苦<sup>り</sup>なり、己<sup>り</sup>が  
藥<sup>り</sup>を以<sup>り</sup>て他<sup>り</sup>に分<sup>り</sup>たんと欲<sup>り</sup>す。正<sup>り</sup>義<sup>り</sup>の意<sup>り</sup>志<sup>り</sup>は勢<sup>り</sup>至<sup>り</sup>  
と同<sup>り</sup>うし、即<sup>り</sup>ち己<sup>り</sup>を尅<sup>り</sup>め己<sup>り</sup>を犧<sup>り</sup>て聖<sup>り</sup>意<sup>り</sup>の現<sup>り</sup>は  
れにつとめ、己<sup>り</sup>が分<sup>り</sup>を守<sup>り</sup>り他<sup>り</sup>人<sup>り</sup>の福<sup>り</sup>祉<sup>り</sup>を保<sup>り</sup>護<sup>り</sup>し、

真<sup>り</sup>又<sup>り</sup>勇<sup>り</sup>沈<sup>り</sup>毅<sup>り</sup>いかなることに望<sup>り</sup>みても屈<sup>り</sup>せず撓<sup>り</sup>  
まず、また吾<sup>り</sup>人<sup>り</sup>は不<sup>り</sup>動<sup>り</sup>の智<sup>り</sup>劍<sup>り</sup>を執<sup>り</sup>りて己<sup>り</sup>が貪<sup>り</sup>瞋<sup>り</sup>  
痴<sup>り</sup>を害<sup>り</sup>し。地<sup>り</sup>藏<sup>り</sup>の愛<sup>り</sup>に倣<sup>り</sup>いて世<sup>り</sup>の人<sup>り</sup>に待<sup>り</sup>せん。

高<sup>り</sup>尚<sup>り</sup>なる理<sup>り</sup>想<sup>り</sup>を文<sup>り</sup>殊<sup>り</sup>の聖<sup>り</sup>童<sup>り</sup>に習<sup>り</sup>い、遠<sup>り</sup>大<sup>り</sup>なる希<sup>り</sup>  
望<sup>り</sup>を普<sup>り</sup>賢<sup>り</sup>の行<sup>り</sup>願<sup>り</sup>に学<sup>り</sup>び。向<sup>り</sup>上<sup>り</sup>進<sup>り</sup>趣<sup>り</sup>、萬<sup>り</sup>善<sup>り</sup>萬<sup>り</sup>行<sup>り</sup>を

もて此<sup>り</sup>土<sup>り</sup>に樂<sup>り</sup>邦<sup>り</sup>を实<sup>り</sup>現<sup>り</sup>さん。悪<sup>り</sup>人<sup>り</sup>の迫<sup>り</sup>害<sup>り</sup>は心<sup>り</sup>靈<sup>り</sup>

を研<sup>り</sup>くの利<sup>り</sup>器<sup>り</sup>。一<sup>り</sup>切<sup>り</sup>の誘<sup>り</sup>惑<sup>り</sup>は尅<sup>り</sup>己<sup>り</sup>忍<sup>り</sup>耐<sup>り</sup>の試<sup>り</sup>檢<sup>り</sup>具<sup>り</sup>、

若<sup>り</sup>し現<sup>り</sup>世界<sup>り</sup>を以<sup>り</sup>て目<sup>り</sup>的<sup>り</sup>ある階<sup>り</sup>梯<sup>り</sup>なる修<sup>り</sup>行<sup>り</sup>士<sup>り</sup>と  
觀<sup>り</sup>じ来<sup>り</sup>る時<sup>り</sup>は、普<sup>り</sup>薩<sup>り</sup>六<sup>り</sup>度<sup>り</sup>萬<sup>り</sup>行<sup>り</sup>を修<sup>り</sup>すべき諸<sup>り</sup>の器<sup>り</sup>  
具<sup>り</sup>が全<sup>り</sup>備<sup>り</sup>るに非<sup>り</sup>ずや。經<sup>り</sup>に此<sup>り</sup>土<sup>り</sup>一<sup>り</sup>日<sup>り</sup>の修<sup>り</sup>行<sup>り</sup>は浄<sup>り</sup>

土に於て百歳するに勝れりと。吾人は斯るが大  
利なる此土なることを自覚するが故に、<sup>すこしのひま</sup>寸陰

を宝とし己に<sup>つとめ</sup>本務を<sup>つく</sup>竭さんとすべく、然り而し

て<sup>このよ</sup>方便土の<sup>つとめ</sup>を全く<sup>おわ</sup>卒る日には、必ず目的

たる<sup>まったき</sup>実在の<sup>ごくらく</sup>報土、即ち<sup>ときわのみくに</sup>無余涅槃界に帰る期ある  
と信ず。経に「其国に生ずることを得て諸々の  
菩薩声聞大衆に共に歎誉して其功德を称せら  
れん」とは蓋し精神更生しおわって聖旨実現の  
為に活動せる人を称するなり。

身体の更生。己に更生したる精神は如来大心  
光中に理想の<sup>あそ</sup>浄土に<sup>あそ</sup>逍遥ぶものゝ、肉の有らん

限りは自然の<sup>よ</sup>約束を全く脱する能はず。弥<sup>よ</sup>方便

の<sup>つとめ</sup>業を<sup>おわ</sup>卒る<sup>まよい</sup>暁には、無明生死の夢醒て大ネハ

ン城にて<sup>さとり</sup>無上菩提の宮に住し、真善妙美の園に  
は常楽我浄の華鮮かに四智円満の日は明けく、  
三身一如の月清らかなり。然るときは即ち体は  
本覚の都に在て化を百億に分ち、こゝに於て一  
切諸仏は即ち本覚の弥陀。弥陀即一切仏たるの  
真理は自ら<sup>さと</sup>証らん。

### 如来三身の説

如来は本一体にして三身まします。三身とは  
法身、報身、応身是なり。

法身は宇宙萬有の源にして天地萬物を産出  
し保存する<sup>ちから</sup>権能あり。法身は始めもなく終もな

く本然の自性なれば自性天真仏と<sup>い</sup>曰ひ、宇宙全  
体が如来の身心に在ませばを物心不二のビル  
シャナと云ひ、また法身は一如の体にましませ

ども<sup>うち</sup>内容豊富の<sup>がんぞう</sup>性徳を<sup>ちから</sup>含蔵するが故に如来蔵  
性と名く。法身仏に一切智一切能の両徳を有し、  
天地万物を開発し産出するに秩序を整束せる  
理性を一切智と曰ひ、万物を生活々動せしむる

を一切能と云ふ。法身の<sup>ちから</sup>権能によりて生存せる

<sup>いけるもの</sup>精神生命を向上しそれを<sup>ついの</sup>終局目的の<sup>ねはん</sup>大涅槃に

おさ  
撰め取りて無上覚を証せしむるは報身の権能  
なり。

報身如来とは本智慧法身の体相もなく形も  
無きなれども不可思議の靈力より、衆生の為に  
万徳円満を表せるいと麗しき相好を具へ威嚴  
たか  
巍く金銀摩尼宝石を以て莊嚴せる樓閣に光明  
永へに輝き、唯光榮と靈福とに充さるゝ処に在  
して、神聖正義慈悲等の聖徳圓かに備へて光明  
遍く法界を照し信念の衆生を撰めて報土涅槃  
の常樂を得せしむ。報身は釈迦如来が証見給ふ  
み  
境<sup>こころ</sup>界にて吾人が信仰の報ひとして撰取せら  
るゝ処なり。

応身。現世界の無明と罪惡とに迷没る物と  
あわれ  
哀憐み、報身より身を分ちて人類と同じき身を  
以て世に出で衆生を教<sup>ど</sup>度するを応身と為す。教  
祖<sup>しゃかむに</sup>釈迦牟尼是なり。仏陀初めトシタ天に在して  
天上及び下界を利益し、地上に出で中印度カピ  
ラ<sup>じょうぼんおう</sup>の淨飯王を父とし、マヤ夫人を母とし、幼  
名をシタルダと曰ふ、聰明叡智五明四吠陀<sup>べだ</sup>に精  
通し、技芸<sup>ぎげい</sup>として習ふに成らざるなし、四門  
の遊びに世の無常を悟り、国と位とを捨て山に  
入て道を学し勤苦<sup>ごんく</sup>すること六年、竟にマカダ国  
ガヤのヒバラ樹の下金剛座に座し、禪那三昧に  
入て一夜天魔<sup>さまたげ</sup>の碍<sup>しはず</sup>を降伏し臘月八日東の天  
に明星の輝き出る時無明永夜の夢覺めて朗然<sup>ろうねん</sup>  
として正覚を成じ罪惡の源を解脱し真理を悟  
り給ふ。仏陀は正覚の暁よりネハンの夕に至る  
まで教ゆるに涅槃の真理を以てす。涅槃とは無  
明生死の眠覺て本覺真如の顯はれたる常寂光<sup>ときわ</sup>

の都、無量の光明輝く処なり。仏陀は八十才にしてクシナなる<sup>かくりん</sup>鶴林に於て別を告るとに先だちて其徒に示して曰く、我ガヤの菩提樹下に於て正覚を得たるは方便示現の身にて、眞法身は<sup>あみだ</sup>無量寿如来にて在れば永恆い常住して而も滅度し給はず。凡夫が肉眼にて見る処の世界は時ありて滅すべきも我眞実の浄土は安穩にして天人常に充満せり、園林諸の堂閣種々の宝をもて莊嚴せり、仏陀は一切の衆生を教へてネハン即ち浄土に<sup>みちび</sup>誘く為に世に出たりと。

法身としては天則秩序に天地萬物を産出し保存し、報身としては終局目的の規律に従って衆生を攝取して浄土に帰趣せしめ、応身としては人の身をもて衆生を教化す。斯の三身は衆生の為に三容に現するも本一体にましませり。

## 祈祷要解

### 至心に帰命す

献身とは先づ第一に己が無知無力を<sup>さとり</sup>自覚し、己を空ふして<sup>すべて</sup>全幅を<sup>ささ</sup>犠げて如来に<sup>つか</sup>事へ奉る。文に四あり。一、宗教の要たる<sup>みひとり</sup>独一本尊に対して<sup>いつも</sup>始終心を一にして無上の尊敬をなすこと。二、<sup>いづこ</sup>一切処に<sup>いま</sup>存在し<sup>いけ</sup>玉う活る如来を信じて至誠心をもて<sup>うやま</sup>恭敬ふべきこと。三、此身心は如来に依て<sup>いけ</sup>生存る故にアナタに<sup>さとり</sup>献げて仕へ奉ること。四、身の行為と口の言語と意の思想に於て<sup>さかえ</sup>光栄を現はすべきこと。

解。<sup>いまさ</sup>在ざる処なきは経に「如来は是法界の身、一切衆生心想の中に入る」と録せり。

### 至心に勧請す

勧請。如来の分身たる<sup>れいおうじん</sup>靈応身を我身心に<sup>しょう</sup>請じて常住の指導を祈る。

一、此身ば如来の靈応を安置し奉る聖なる宮と信すべきこと。二、靈応の常住を請ふこと。三、聖意の指導を仰ぐこと。

解。靈応とは小乗教の五分法身即ち戒定慧解脱解脱知見と同じ、彼にはたとへ肉身の釈迦仏陀は已に滅し玉ふとも五分法身は羯磨の法に依て発得し人の身内に在して滅する事なしと。大乘教にて即ち如来真法身として其靈能は本より法界に遍在し、人の信念ある処に随て発得す是を応身と名づく。この感應を得て始めて靈の生命とし活る信仰と成り得るなり。諸の聖者とは、観音勢至文殊普賢等の法身のボサツ、龍樹天親善導法然等の生身の聖者、斯らの聖者には如来の分身たる靈応が其身心に存在し智悲兼備し、自他並べ利し、如来の聖旨を其身の行為により現し玉ふ。観音の宝冠に一の化仏を戴けるは即ち是ミダの分身たる靈応が其脳裡に存在せるを表はし、而して何人の信仰も之に倣ふべきことを示し玉へるなり。

### 至心に発願す

進徳とは聖意を体して靈的行為を成就せられんことをいのる。

一、道徳の原動力は如来の靈応なること。二、教組釈迦牟尼の人格現なること。三、釈迦文は教主にしてまた完徳の鑑たること。四、靈應に充されていかなる境遇にも動かざるを誓ふこと。五、弱き我に至善の国に進むべき道徳行為を成しうるやうに聖恵を仰ぐこと。

解。麗色とは斯経の序に「爾時世尊諸根悦豫し姿色清浄にして光顔巍巍たり」とは世尊が斯

経を説玉ふに先だち、いと麗しき相すがたを示し玉ふ。ゆえは斯経に説く処の如来を信じ其慈光を得たる時は何人も皆内心が靈に充たされ内外共に清浄になり得べきを表はし玉ひしなり。

釈尊姿色常に清かなるは内にミダの靈に充ち玉へばなり。世尊はいかなる境遇ぼあいに臨みても麗色を変じ給ふことなし例へば一時ダイバがアジャセセ王そそのかを唆いつわして世尊を矯しょうり請じて火坑あなに陥おとして弑しいし奉らんとす。世尊は斯る急難に遇玉ひし時に当り光顔殊みかおに麗しく欣笑えみをふくみして光を放ち玉ふ。時に王其尊容みかおのいと殊勝すぐれなるを拝し感じて始めて仏陀に帰し奉れりと。また世尊は諸の外道せまりの迫害せんだみにも旋茶弥そしりの讒謗にも姿色きそん毫しも毀損し給ふことなし。世尊は害意をもて向ふ處のダイバに於るとラゴラに於ると何れにも愛憎の異想あることなしと。世の人々が貪瞋内に動く時は忽ち其面貌に現はす。世尊は内靈に充ち玉ふいかなる境遇ぼあいにも光顔を変じ玉ふことなし。

### 至心に感謝す

感謝。夕には今日己が身と意とに行為のいかなりしやを反省し、善事は悉く恩恵によるものとして深く感謝し、悪事は皆己が過なるが故に懺悔すべし。

感謝に二意あり。一、我身心わがみとこころの生存活動いきはたらくは全くアナタの賜たまものとして先づ其恩徳を謝し奉り。二、我身は人間として生存したりしも、若し聖き道よに向上すすむすべき生活にあらざれば將た何の貴かあらん。然るに如来は弱き我に聖なる恩寵めぐみを加へて、恩恵を他人にまで頒つことを得さしめ給ひし其恩広大なり。依て深く感謝し上る。

### 至心懺悔す

懺悔。今日の犯したる罪惡は全く己が至らざ



るより起りしものなれば深くざんき慚愧して悔い改  
たむべし。

罪惡を犯したる原因に二あり。一は己が肉を  
ほしいまま恣にせしより。二、如来の恩寵を忘れしよ  
り。

懺悔の時己が罪をざんみ吟味すべし罪の目録に三  
あり。

一如来に対し。(一)如来を忘れざりしか、(二)、  
祈念を怠らざりしか、祈念の時よこしま邪なる思を起  
さざりしか。

二他人に対し。あなどり いから ねたみ そこない輕侮憤怒嫉妬害意等のすべて人  
の生命財産名誉自由等に害を与へざりしか。

三己に対し。ごうまん らんだ けがれ ふようじょう ふしんせつ傲慢懶惰染汚不撰生不忠愛等をも  
て徳を損せざりしか。

斯らを能く吟味し己をせめ尅て悔ひ改ため再び犯  
さざることを要す。

## 至心に回向す

ほつがん なにより のぞみ發願とは最終の目的とする遠大の希望なり。

一、これまで従前我れ真理に向ふべきは目的をあやま過りし

全く心のやみ もとい無明に起因す。二、如来の恩寵により

て我はさめ覚醒たり。三、終局の要求とし永遠の生  
命と常住を平和を望むこと。四、大乘ボサツ

の志願なるじょうぐぼだい げけしゅじょう上求菩提下化衆生を遂げんこと。五、

よこしま邪をさけ正に進むこと。六、一切衆生と共に

中等のやすき安寧を求むること。

もん文に「かのくに いた おわつ じんつう ほうかい彼国に到り畢て神通を得て十方界に入

て苦の衆生を救はんこくう虚空法界も盡んや我願も  
またれ是の如くならんと發願す」

## 修養のすゝめ

諸賢よ心霊修養の要に祈祷拝礼、念仏三昧、坐  
禅工夫等あり是らの方法により如来の光明を

ぎやくとく<sup>き</sup>  
獲得し聖き人となり善き生活に至るを目的と  
す。禅の大悟<sup>けんしょう</sup>見性他力門の信心開発、キリス  
ト教の聖霊に感じたりと曰ひ名を異<sup>こと</sup>にすれど  
も帰する処此大光明に接するに外<sup>ほか</sup>ならず、斯<sup>この</sup>光  
を感得<sup>かんとく</sup>して初めていける信仰に入たるものと  
す。されば求めよ、真理の光明を。